

Title	序：「神への知的な愛」の共同体
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.14, 1998.11 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3426
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序

——「神への知的な愛」の共同体

聖学院大学総合研究所は今年創設から十周年を迎えた。この研究所ははじめから生命力盛んなものであった。さまざまな研究活動の十年の歩みが、鮮明な足跡を残してひとつの歴史となった。この研究所の活動に参加し、この研究所をここまで成長させてくださった方々に心から感謝申しあげる。

本号は、研究所の活動の多様な面をあらわしている。第一部は、三年がかりの共同研究「市民社会と国家の役割」の研究会での最近なされた研究発表である。それぞれは、活発なディスカッションを惹き起こし、興味深い展開を伴っているが、その部分が割愛されたのは惜しいと思う。次は、国際シンポジウムの記録である。バルカン半島ほどではないにせよ、朝鮮半島は、アジアの危険であることは否定できない。朝鮮半島問題の研究はその後も続けられている。本研究所は、池明観教授との関係に感謝している。北を見る視線という梃子も、韓国に支点をもっていなければ、動かすことはできないと思うからである。ロックの『ガラテヤ人への手紙』の翻訳が完成し、それがここに発表されたことは、喜ぶべき収穫である。日本では、アイザック・ニュートンが、ダニエル書やヨハネの黙示録の注解を書いていることもあまり知られていないが、そのような面の理解なしに十七世紀イギリスの思想状況を理解することはできないであろう。

鵜沼教授の論文は、研究所のもう一つの共同研究「グローバル化の文脈における総合的日本研究」の研究会での発表である。このテーマは、大学の日本文化学科の教授会メンバーの参加によって、毎回活発な議論が展開されている。第三部の諸論文は、本研究所の一つの枝である組織神学研究所の研究活動の所産である。

このような多様な活動は、本研究所の生命力の現れである。生命は目的をもつ。それが統合力となる。この研究所の活力は、つきつめれば目的の共有によるものと思う。聖学院大学総合研究所は、意味内容は違いますがスピノザの言葉を借りて言えば、「神への知的愛」の共同体でありたいと願っている。

一九九八年二月二三日

聖学院大学総合研究所 所長 大木英夫